コラム

技術者の一生と CNCP

個人正会員　小林 大

突然、皆川先生から、「CNCP 通信のコラムを書いてくれませんか？」と言う内容のメールをいただきました。それほど深く考えずに引き受けさせていただいたものの、「市井の一介の技術者である私には少々荷が重いのでは？」と後悔しつつ、末席とは言え CNCP の一員、気を取り直して筆を進めることとします。

1　技術者の一生

私は、地元の名古屋で橋梁のメンテナンスに関わる技術者を募り、2009 年から年 4 回程度の勉強会を主宰しています。同会員が所属する企業は、点検会社、調査会社、建設コンサル、設計会社、材料メーカー、ゼネコン、ファブなど多岐にわたり、会員は 100 名を超え、毎回 40 名前後の技術者が参加されます。ある時、勉強会に参加されたみなさんを拝見していて、頭の中にぽつんと、「私達のような市井の技術者は、技術者としてどのように一生を終えるのだろうか？」と思いが浮かびました。

2 H26 年以後の道路橋の点検事情

平成 26 年、私が専門とする道路橋においても定期点検が法令化され、日本国内に約 70 万橋の道路橋が存在することが明らかになりました（図-1）。
その約 93%を占める都道府県等や市区町村が管理する道路橋の多くが無点検であったことも明らかとなりました。この事実は、国民にとって青天の霹靂だったことでしょう。しかし、点検手間のひとつの指標となる橋面積に着目すると、橋梁数では約 93%を占めていた都道府県、市区町村が約 55%まで減少し（図-1）、無点検問題に対する印象が随分異なります。また、市区町村における減少が著しく、市区町村においては、規模の小さな道路橋が点検対象となることが伺えます。

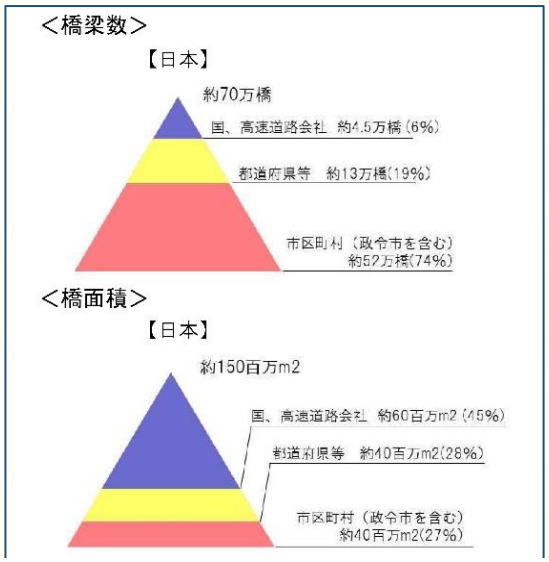

図-1　日本国内における道路橋の「橋梁数」と「橋面積」
※　道路メンテナンス年報より引用

3　CNCP との出会い

このような点検事情のもと、とりわけ市区町村が管理する道路橋に対して「定年退職された技術者が個人ベースで、もちろん、老後の生活に無理がない範囲で対価を得ながら点検に携われないだろうか？」と考えました。技術者として幸せな一生を終えられる一助にならないかと。ただ、そのためには、「技術者の病気など不測の事態に対するバックアップ」「技術者の継続教育」などの中間支援が必要と考えました。

このような考えを持ちつつ「インフラメンテナンス国民会議（仮称）」（※1）の準備会に参加したところ、CNCP でご活躍される有岡先生、皆川先生に出会うことになり、即、CNCP に参加させていただくことになりました。　※1 http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/maintenance/03activity/03_03.html

4　今後のこと

私たちは、短期間に近代化されたインフラが一斉に高齢化する場面に、幸か不幸か技術者として立ち会っています。そんななか、私が勤務する会社での職務である橋梁のメンテナンス技術の研究・開発、岐阜大学および愛媛大学において講師として関わらせていただいている「社会基盤メンテナンスエキスパート(ME)養成講座」、私が主宰する勉強会と言ったその他の活動が、CNCP への参加、そのきっかけとなった「インフラメンテナンス国民会議（仮称）」により、横断的、あるいは大きな流れによりひとつにまとまりつつある、そんなことを実感しています。